

---

# 「時効不成立」 2

長根兆半

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「時効不成立」 2

### 【Nコード】

N2986F

### 【作者名】

長根兆半

### 【あらすじ】

20年ぶりに再会し、ケジメをつけようとして、出来た。が、女は、さらにお為ごかしが、親切ごかしに、もう一度会いたいという。男は、自分の付けたケジメが、これで破壊され、20年の過去の空白に火が付き、決定的なケジメを着ける。

## 復讐

「時効不成立」 2

### 第1章 復讐

「これでケジメは付いた」と男は、連れ込み宿の一室で、口ごもるように言って、腕時計を見た。

十時半、夕食から帰って、まだ三十分しか経っていなかった。

薄明かりの和室に立ち、窓のカーテンを開けた。

かすかに外の明るさを映す、アルミサッシの不透明な窓は、簡単に開いた。

窓の前に影絵のように立った男の身長は、百六十四・五センチくらいだろうか、秋口の今頃、田舎ならひんやりと、季節を感じさせる空気が、部屋に流れ込むのだが、東京の空気にはやはり、生温い淀みがあった。

窓のすぐ下は、建物に沿った1メートル幅位の打ちっぱなしのコンクリートの通路になっていた。

その通路に沿って、背の高い垣根が黒々と、街の視界を遮っている。垣根の隙間から、チラチラと東京の灯が、僅かに見え、通り過ぎる車のライトに驚いたのか、リリンと弱々しい虫の音が一度して止んだ。

男は、白いYシャツに濃い水色のネクタイを締め、目立たないほどの白い線が入っている黒の上下、短髪刈りの頭が、ヤクザのようでもある。

濃紺のダブルのトレンチコートを着ると、片手に細長いケースと靴を持ち、片足を窓から出し、もう一方の足も外に出すと窓枠に座った。

首を捻って部屋の中を見ると、使ったお絞りが二本置いてあるテー

ブルに、白地に黒の千鳥格子のスーツを着た女が、うつ伏せになっている。

呼吸をしている様子も動く様子も、まったくないのを見て、生死を確認しようかと、窓枠から尻を内側にずらしかけたが、途中で止めた。

男はそのままの姿勢で、しばらく女の様子を見ていたが、フン、と鼻から僅かに息を吐き、どっちでもいい、と言うように体を外に向け、すぐさま外に飛び降りた。

男は外の通路に降りると靴をはき、ポケットから、女性用の化粧用コンパクトを出すと、建物に隠れるようにへばり付いた。

コンパクトを開き、鏡になっている部分を建物の角の地面へもって行った。

鏡の角度を変え、建物の薄暗い正面の、入り口の上に付いている防犯用モニターカメラを、その中に探した。

カメラは、ゆっくりと左右に動いている。

右に振り切った時に、垣根の切れている門口の、左の半分が消え、左に振り切ってしまうと、右半分が消えていた事は分かっていた。

やはり九十度をカバーしている、と判断できた。

幅三メートル程ある門口を中心に行っているが、左右の物陰をも監視したいが為に、カメラは左右に振り切った時、門口の半分が僅かに死角になっていることを、男は知っていたから、鏡の中で、カメラの往復時間だけを確認していた。

そしてカメラは、一往復を四十秒かけて九十度をカバーし、死角の時間は、二秒弱の静止がある事が分かった。

男は鏡の中のカメラを何度か見送り、カメラが自分に向かって来たのを、やり過し、完全に反対を向き、静止した瞬間、死角になった門口の垣根に沿って表に飛び出した。

道に出た瞬間、男は目立たぬ歩行者に変わった。

男は幾分排気ガスの匂う、冷えた空気の中を歩きながら、さっきまでの事を頭の中で振り返った。

入る時は、回りを伺う振りをしてカメラから顔をそらし、受付の小さな窓からは、係りの女性の胸から下しか見えなかったが、半年前にはなかったモニターカメラのテレビが、その女性の右後、受付室の片隅にあった。

視線を、受付用紙とテレビを何度も往復させ、記帳しながら観察しておいた。

出る時、仮に映ったとしても、それは物影程度でしかないはずだ。という自信を男は持った。

部屋で、コンパクトをバツクから取り出す時は、お絞りを使った。窓枠や部屋の指紋は、不特定多数の人間が出入りする場所だけに、自分を特定するだけの価値は無いと、男は思い、東京から、否、日本から姿を消した。

A2Z保険株式会社、外勤指導員の唐等末美枝子（四十一）が、上野のラブホテル「紫」で、白地に黒の千鳥格子のスーツを着たまま死体で発見されたのは、チェックアウトの催促に、何の反応も無いことを不審に思った従業員によってだった。

一九九〇年九月四日の十一時だった。

身元は、バツクの中に数十枚あった名刺から、数分後には、確認が取れた。

『・・・ラブホで死体発見、自殺か他殺か』という活字が、その日の夕刊に躍ったが警察は何の手がかりらしいものを、発見することは出来なかった。

しかし、同伴の男が不明な事は、明らかに他殺と推定できた。

宿帳に記載されている内容は、当然偽装だった。

拭き掃除は朝にやり、途中で休憩使用された場合は、ベッドメーカーとトイレを確認するだけと言うだけあって、現場から発見できたものは、数種類の指紋と数種類の毛髪だけだった。

その部屋は、昨日の夕方から数組が使用していた。唾液の痕跡、トイレの使用すら確認できなかった。

被害者の所持品を確認したが、現金もそのまま、銀行カード三枚もそのまま、強いて言えば、女性にしては化粧用コンパクトがないくらいだった。

それも、家族からの証言で、たまに忘れていた事があったと言う。遺体は、死亡原因が不明なことから、司法解剖に回された。

一週間後、胃袋から、焼肉らしい未消化物と共に、トラフグの肝臓三切れ、約十グラムが摘出された。

その毒、テトロトキシンは一グラムの臓器で、二十グラムのネズミを一匹殺せる二十万マウスと言う猛毒だった。

被害者の唐等末美枝子が摂取した毒量は、人間の致死量をオーバーしていた。

捜査本部は『ふぐ毒殺人事件』という看板に書き換えた。

モニターカメラの記録を確認しても、そこには、関係の無い数組のアベックが写っているだけで、被害者と思われる女性同伴の男の顔は、左右の後方からのものばかりか、俯きかげんの映像だけで、人相を判別する事はできなかった。

その数十分後の画面に、何か一瞬光ったものを建物の角に、発見できたが、鏡のようでもあり、表を走った車のライトのようにも見え、拡大しても、判別は出来なかった。

受付の女性は、男の手を見ただけで、同伴したはずの女性を見ていなかった。

室内で争った形跡も無い、お絞りの状態から、場所柄一人で入室したのではないことは分かる。

被害者のバツクから、お絞りの洗濯液と同じ成分のものが検出されたが、本人が付けたとしても、何の不思議も無いほどだった。

密室ではない現場の状態からだけでは、まるで加害者は、幽霊か透明人間に思われた。

捜査本部は、近くのふぐ料理店はおるか、ふぐ関係の業者、更には東京都内に在住するふぐ調理師のアルバイト捜査に入った。

被害者が宮城県出身と言うこともあって、捜査主任に、同県出身の

米盛勇夫警部補が当たった。相棒に、若手で気の合う九州出身、前田伸雅刑事を選んだ。

被害者の解剖所見で、気になることは、焼肉の中に、なぜフグの肝臓が混在していたのか、かなり不自然な事だった。

何処の焼肉レストランでも、魚類の肝臓を使うことは、まったくなかった。

この不自然さが、他殺説へのさらに強い根拠となった。

米盛勇夫はベージュのシングルコートの下に、ありきたりの背広を着て、薄手の灰色のマフラーを首に掛け、九月十一日、宮城県古川市に向かった。

一昔前までは、いかにも御登りさん、と分かる東北方面からの客が目立っていたが、今は、皆こざっぱりとした服装で、それとは見分けが付け難いなと思いつつ、彼は上野駅に入った。

その後を、着膨れを隠せない前田が、コーラを片手に一こずつ持って、追いかける。

「随分と人が出ていますね主任」と息を弾ませて、前田が言った。

「ここは、東京への北の入り口だからな」

二人は、時刻表を見上げ、東北新幹線の下りホームを確認した。

座席に着いて間もなく新幹線は、乗客に発車の体感も与えず滑り出した。

新幹線が、スピードを上げるにつけ、やがて刈り入れの終わった田園が広がり、色づいた山々が車窓に広がりはじめた。

何時見ても、東京の創られた自然とはまったく違う。

もうすぐ五十に手の届く歳になっても、やはり、米盛勇夫には故郷の匂いは懐かしかった。

そして、小学、中学、高校まで同じだった竹馬の友である鈴城広州と、会えそうな気もした。

これから行く古川市は、奥羽山脈と太平洋の間に広がる大崎平野の中心にあった。

そこから数10キロ東に行くと、遠田郡と言う小高い加護坊山を囲むように穀倉地帯がある。その山の麓に、大貫村は在った。

村の比叡神社を司る神主を父に、長男として鈴城広州は生まれ、米盛勇夫は、同じ村の富豪農家の長男として生まれ育った。

鈴城広州の父、神主は、町の青少年保護観察委員をしていたが、老齡の為、神社を人に明け渡し、間もなく世を去った。

それを期に鈴城広州は、石巻に引越していた。

米盛勇夫は、同じ長男と言うこともあつてか、同じ野球部員としても、一番気の合う奴だったと思ひ出すと、利発そうな目と、ひ弱な感じのしたひょうきんな、一人の少年をも、思ひ出した。

・・・確か、山の神とか・・・言つて皆で、かまつたまでは思ひ出すのだが、なぜ山の神なのか、少年の正確な面影も名前も思ひ出せなかつた。

山の神と呼ばれていたその少年を、一番可愛がつていたのが鈴城広州だった。

多くの部員を思ひ出すのだが、今では音信が途絶えていた。

時折、傍に居る前田伸雅が、新幹線の車窓を流れる景色に顔をほころばせ、何か話しかけてくるが、話に乗る気にはなれなかつた。

それより、あの少年を肴に、懐かしい鈴城広州との昔話に、早く花を咲かせてみたかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2986f/>

---

「時効不成立」 2

2010年10月10日13時59分発行